
キッチン

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キッチン

【Nコード】

N3003B

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

眠りにも見放されてしまった熱帯夜。キッチンの方で物音が…。夏子は起き上がってキッチンへと足を運ぶが、誰もいない。ベッドに戻るとまた、キッチンで物音が。真夏の夜の妄想？

熱帯夜だった。

夜になっても気温は下がらず、ベッドに入っても、暑くてなかなか寝付けなかった。

まったくの無風状態で、じっとしていてもじんわりと汗が染み出してくる。

エアコンのスイッチを入れればよいのだが、決まって翌朝喉が痛くなる。

明日は新人研修第一日目だ。朝9時から6時までしゃべり続けになるだろう。

喉が痛くては仕事にならない。

眠りにも見離されてしまった夜、あれやこれや考えていると、余計に神経が高ぶって眠れなくなる。

ひとつの考えがどんどん飛躍して、昼間では思いもつかない突拍子もないストーリーが、続々と展開していく。

レム睡眠に落ちればこれが夢になるのだろうか。

何度も寝返りをする。

ベッドに横たわってから二時間が経っていた。いっこうに睡魔が襲ってこない。いったいどうなっているんだ私の頭の中は。

こんな夜中にセミが鳴いている。狂ったように鳴いている。

もう8月も終わりだというのに。

相思相愛の相手に巡り合えずに、このまま朽ち果てていくのは不本意だと、嘆き悲しんでいるのだろうか。

時計を見ると午前2時だった。キッチンの方でボタンと物音がした。

部屋の中にと、様々な音がする。

時計の音、エアコンの振動音、冷蔵庫のモーター音、階上の家の足音、隣人のドアの開け閉めの音、風に揺れてベランダのゴミ袋がカサカサ音を立てる。

大概の音は気にならない。音を聞けば発生源が推測される。

しかし、聞きなれない音には注意力が集中する。

特に眠れない夜は。

その音は夏子の理解の範囲を超えていた。耳をすまし、神経を集中した。冷蔵庫のドアを開け閉めする音。しかし、キッチンに人がいなくて、ありえない。

この部屋に、今現在、夏子以外に冷蔵庫を開け閉めできる人間はいない。

夏子はベッドを抜け出し、恐る恐るキッチンの方向へ歩いていった。キッチンのドアを静かに開け、中をうかがった。

誰もいなかった。いるはずはなかった。キッチンの中をぐるっと一回り見回した。何も変化はなかった。

上の部屋の人何かを落としたのだろう……。

夏子はまたベッドに戻った。

暑い……。

汗で肌がべとべとだ。脳の神経細胞はフル回転をしている。そんな感じだ。

しかし、明日は新人研修だ。このまま目を瞑って静かにしていた方が賢明だろう。

眠れない。暑い。眠らなければならない。まるで地獄のようだ。

ボタン！バタバタ・・・

また、さっきの音。

私がベッドに戻ったのをいい事に、気兼ねなく誰かが何かをしている。私の家のキッチンの中で。

夏子は今度は、ベッドから出ると、足音を立てずに、キッチンへ走り、ゆっくりとキッチンのドアを開けた。

誰もいなかった。いるはずはなかった。キッチンの中をぐるっと一回り見回した。何も変化はなかった。

誰かが隠れている。どこかに隠れている。6畳そこらの狭いキッチンだ。隠れるところなどあるはずはない。

食器棚のドアを開けた。食器以外何もない。流し台の扉を開けた。何も無い。引出しを開けた。何も無い。

炊飯ジャーの蓋を開け、トスターの蓋を開け、電子レンジの蓋を開け、蓋と言う蓋を全て開けた。

音の発生源になるようなものは何もなかった。

睡眠不足だ。神経が過敏になりすぎて、ちょっとした音が100倍にも200倍にも倍増されているのに違いはない。

夏子はまたベッドに戻った。仰向けになり、眼を瞑った。

また、さっきの音が聞こえてきた。

私がベッドに戻るのを待っていたかのように、バタバタ、バタバタ遠慮なく騒いでいる。

しかし、私はもう、騙されない。これは妄想に違いないのだから。

夏子はタオルケットを頭から被り、耳を覆った。
汗がだらだらと、流れ落ちた。

携帯の時計を見ると3時ぴつたりだった。

暗闇の中で魔物たちが行き交う丑三時。

急に身体が冷え込んだ。汗が体温を奪い、夏子の身体は恐怖と寒さで震えだした。

そんな夏子をあざ笑うかのように、キッチンでは大きな音が・・・。

明日は新人研修だ。このまま目を瞑って静かにしていても、眠れそうにない。賢明な手段ではない。

妄想であったとしても、あの大きな音の発生元を突き止めなければなるまい。

そうでなければ、私は朝まで眠れず、妄想に負けるのだ。妄想には負けたくない！

夏子はもう一度キッチンへ向かった。今度は相手に気づかれないうちに、ゆっくり進んだ。キッチンの前に立ち、中の様子に聞き耳を立てた。

バタン！ バタバタ バッタン！

ボタン！ バタバタ バッタン！

騒音は響いている。

どうやら相手には気づかれてはいないようだ。

キッチンのドアを一気に開けた。

冷蔵庫のドアが一瞬にして閉じた。ということは今まで開いていたということだ。

やられた。

冷蔵庫は予想外だった。こんな冷たい部屋の中で生きられるものがいたのか。夏子は冷蔵庫の中を見落としていた事をひどく悔いた。

夏子はキッチンの明かりを点け、ゆっくりと冷蔵庫に近づいた。間違いない。犯人はこの中にいる。夏子は冷蔵庫の前に立った。

閉じられたドアの隙間に布のような切れ端が。切れ端をめくると、そこには人間の生足が……。

しゃがんで間近で見ると、赤茶けた色に染まっている。

夏子は思い切って冷蔵庫を開けてみた。

ぶつ切りにされた人間の肉の塊が血を滴らせていた。

ドアはまた、直ぐに閉じられた。

冷蔵庫は中の食物を咀嚼しているかのように、形状を微妙に変えていた。

ドアの隙間から肉汁がだらだらと流れ出してくる。

生きている。

夏子は冷蔵庫の前で呆然と立ち尽くした。

ゴックン！

飲み込む音がした。

人喰い冷蔵庫！

冷蔵庫の前から離れようとしたが、足が動かない。

ドアが突然開いた。

キヤーツ！！！！

中から真っ赤な舌が伸び、夏子を一瞬にして巻き込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3003b/>

キッチン

2010年10月15日23時25分発行